

瀬戸内海産軟体動物について*

稲葉明彦

ここにいう瀬戸内海とは紀淡、鳴門、豊予、関門の四海峽によつて区劃された海域を指すもので、いわゆる海洋学的区分に一致する。この海域は一般に塩分濃度が低く、冬期には外洋との差約1%にも達する。水温の変化も著しく、表面水温は夏期27°C~28°C、冬期には8°C~9°Cとなる。水深も平均20~30mに過ぎず、100mを越えるのは僅かに豊予海峡付近の小区域のみである。そのため冬期表水が冷却されると対流によつて底部の水温も低下するので、暖海種の越冬には適しない。もちろん深海性の種類も生息しない。

このような特性をもつ瀬戸内海の軟体動物相を総括的に考察したものは未だないので、以下2、3の観点から内海軟体動物相の特性について述べて見よう。

1. 内海産軟体動物の種数

内海現生軟体動物は813種で分類区分をすれば次表の如くである(括弧内は科数)。

Polyplacophora	ヒザラガイ綱	14(6)
Gastropoda	腹足綱	517(87)
Prosobranchia	前鰓亜綱	368(65)
Archaeogastropoda	原始腹足目	75(13)
Mesogastropoda	中腹足目	178(38)
Neogastropoda	新腹足目	115(14)
Opisthobranchia	後鰓亜綱	139(19)
Pleurocoela	側腔目	63(1)
Cephalaspidea	頭楯目	42(8)
Sacoglossa	嚢舌目	1(1)
Notaspidea	背楯目	1(1)
Nudibranchia	裸鰓目	32(8)
Pulmonata	有肺亜綱	10(3)
Scaphopoda	掘足綱	6(1)
Pelecypoda	斧足綱	256(49)
Prionodesmacea	原韃帯亜綱	76(14)
Teleonodesmacea	完韃帯亜綱	180(35)
Heterodonta	異齒目	135(21)
Adapedonta	無面目	30(8)
Anomalodesmacea	異韃帯目	15(6)
Cephalopoda	頭足綱	20(6)
合計		813(149)

もちろんこの数は今後の調査(特に塔形貝類等の微小種)によつて相当増加することが予想される。これ

等を地域別に比較して見ると次表のごとく、東半より西半、内区より外区に住む種が多い。このことは内海の貝類相が一様でなく、東西及び内外両区で相当差を生じていることを示すもので、外洋水の影響が多い程、種類も増加することが判る。

	共通種	準共通種	区内共通種	内区特産種	外区特産種	区内共通種	外区共通種	総計
東区	230	111	8	37	60	5	451	
西区	230	111	60	91	60	5	557	
内区	230	111	5	36	60	8	450	
外区	230	111	60	92	60	8	561	
					西区共通種	東区共通種		

この表は充分調査された640種について比較したもので後鰓亜綱その他を含んでいない。特産種というのは各地域(凡そ各県別)特産のものを区内で集計したもので内海特産という意味ではない。外区とは和泉灘播磨灘、伊予灘、周防灘を指し、東区とは備讃瀬戸以東(潮流の分れる所を境とする)を指す。準共通種とは播磨灘、備後灘両海区から採集せられた如きもので、東西、内外両区にまたがって分布の知られたものである。

2. 特産種

内海特産と考えられるものは非常に少く、次の3種にすぎない。

Oncidiella kurodai Iw. Taki ヒメアワモチ

広島・愛媛

Sportella kurodai Iw. Taki et Sato MS.

ヤドリシジミ 安芸

Octopus mutilans Taki テギレダコ 備後

従来多くの種が特産と考えられていたが、本州中部や東支那海方面に分布のあることが知られるようになった。この3種も今後の調査によつて特産種ではなくなる可能性は充分考えられる。

3. 潮岬との比較

外洋性の種類がどのように内海に入っているかを知るよい例として、内海と潮岬で著しい種数の相違のある科を掲げて見た。

腹足類	内海	517	潮岬	828
斧足類		256		237
計		773		1,065

* 向島臨海実験所業績 No.57. 兵庫生物vol. 3, no. 4, 1958

I. 種数に大差ある科

		内海	潮岬
Stomatidae	フルヤガイ科	1	5
Architectonicidae	クマガイ科	1	10
Strombidae	スイシヨウガイ科	2	16
Janthinidae	アサガオガイ科	1	5
Eratoidea	ザクロガイ科	1	7
Amphiperatidae	ウミウサギ科	3	20
Cypraeidae	タカラガイ科	4	48
Cassidae	トウカムリ科	2	9
Cymatiidae	フジツガイ科	5	31
Bursidae	オキニシ科	1	10
Rapidae	カブラガイ科	1	17
Olividae	マクラガイ科	2	14
Mitridae	フデガイ科	5	55
Isognomonidae	シユモクアオリ科	1	5
Spondylidae	ウミギク科	1	12

II. 内海に分布しない科

Planaxidae	ゴマフニナ科	0	3
Conidae	イモガイ科	0	46
Hydatinidae	ミスガイ科	0	2
Cavoliniidae	カメガイ科	0	11
Siphonodentaliidae	クチキレツノガイ科	0	2
Argonautidae	カイダコ科	0	3
Angariidae	カタベガイ科、Modulidae		
	カタベダマシ科、Ficidae		
	ビワガイ科、Bullariidae		
	ナツメガイ科、Nuculanidae		
	チリロウバイ科、Candylo-		
	cardiidae	0	1
	ケシノミガイ科 以上各々		

III. 潮岬に分布しない科

Stenothyriidae	ミズゴマツボ科	3	0
Limopsidae	オオシラスナガイ科	2	0
Sportellidae	ケツメガイ科	3	0
Montacutidae	ヘノシガイ科	3	0
Throciidae	スエモノガイ科	3	0
Hydrobiidae	ヌマツボ科、Sclemyidae		
	キヌタレガイ科、Kellyellidae		
	ケシトリガイ科、Glaucnomidae		
	ハナグモリ科、Pandoridae		
	ネリガイ科、Myo-		
	chamidae		
	カタビラガイ科、Cuspidariidae		
	シヤクシガイ科 以上各々	1	0

以上の如く説明を要せぬくらい明かな相違が認めら

れる。I・II表に上げた群は外洋性と考えてよく、特にII表に含まれるものは純外洋性指標となし得よう。II表の殆どが腹足類であり、III表の大部分が斧足類であることも注意すべきである。

4. 田辺灘との比較

紀州田辺湾は外洋に面した典型的な内湾であるが、内海と比較すると共通点を見出すことが出来る。田辺湾口に多いクロフジツボは紀伊水道より播磨灘南部にかけて、及び伊予灘に見られる。タマキビ類は田辺湾では湾口より奥にかけて分布帯の変遷が見られるが、内海では全般的にアラレタマキビ、タマキビ、ヒメズラタマキビが分布し、潮間帯において高位と低位の住み分けを示している。つまり内海は、伊予灘・紀伊水道が外洋に面する湾口に相当する大きな両口を有する内湾と見なすことが出来る。

5. 分布に興味ある種

分布上興味ある種には、ハナグモリ・アゲマキ・イシゴロモ・ハイガイ・コゾツガイ・チリメンユキガイ・ピヨウブガイ・ササゲガイなどの二枚貝、シマヘナタリ・クロヘナタリ・オカミミガイ・ウネハナムシロなどの巻貝がある。これ等は日本列島の島嶼化とともにその生息圏を狭められ、僅かに処々の内湾に遺存するもので、早晚死滅してしまふに違いない。

更にチヨノハナガイ・シコロエガイ・ムラサキガイ・イシカゲガイ・エゾマテ・フトオビクイ・ナミガイ・ヒメシラトリ・サビシラトリ・オオノガイ・シラトリモドキ・ホトトギス・ネムグリガイなどは遠く北海道、千島に至る分布を有し、北方系と見られる種類である。ムラサキガイは帰化種であるが他は往古の分布圏が残存したものと考えられる。

このように内海は種々の点で外洋とは異なる貝類相を有し、他の生物相例えば魚類相も似た特性を有しており、地理的な分布の観点からも内海を独立した分布区域と考える必要がある。

あとがき

このような考察には目録を附すべきであるが紙面もゆるぎないので、別に編さんする予定である。内海各地区の既刊目録の一覧もそれにゆづつてここにかゝげることが出来る。御了承をお願いする次第である。